唐代伝奇「杜子春伝」に見える道教的用語再考（上）

増　子　和　男

前　言

かつて筆者は、唐代伝奇「杜子春伝」に関する一連の論考において[1]、作品中、見出される用語の来源を検討した。その結果、それらの用語は、一見荒唐無稽、作者の想像力の産物と思われがちであるが、その大部分は先行するインド説話、志怪や伝奇、さらには儒、仏、道各教の典籍に来源を求めることの出来るものであり、また先行する時代乃至は同時代人の詩文にも、用例を徴しうるものであった。そして、これらの用語は、作者と同時代の読者たちに、ある特定のイメージが共有されることを予期しつつ、意識的・意図的に用いられているであろうことを指摘した。

就中、この物語の仙薬精錬と完成の成否の鍵を握る「試し」と呼ばれるストーリー展開[2]に現れる道教的用語を検討し、「作者は道教に精通した人物であり、その作者が、自らとほぼ同水準にある特定の読者を想定して作ったのが、本作品であろうと述べた[3]。

しかし、その後、新たな資料も手に入り、何人かの方々からも貴重な助言を受けた。また、周囲を取り巻く研究環境の急激な変化―具体的には、電算機処理によって作られた索引が陸続として発刊されたこと、また様々な文献データベースがインターネット上に相次いで公開されたこと等々―によって、先の論考を補訂すべき点が生じ、更には、右に述べた指摘の妥当性をも再検討する必要が生ずることとなった。

本稿では、先の論考で検討した道教的用語の幾つかの補訂を行い、その再検討を通じて、作者と当時の一般的読者たちの「道教についての造詣の深さ」がどれほどのものであったかを改めて見直すこととしたい。

一

本論に入る前に、作品のストーリー展開のあらましを記しておく。

① 放蕩の限りをつくして無一物となった主人公杜子春は、親類縁者のことごとくに見放されて、落魄して長安東市の西門にたたずんでいた。そこで出会った不思議な老人から、三度に渉って金銭的援助を受ける。

② しかし、このうち二度は、生来の遊蕩癖が頭をもたげたことに

よって、蕩尽してしまう。

③ ようやく三度目にして、浮き世の義理を果たした子春は、老人に従って長安の東にある華山の北峰・雲台峰に登り、そこにある一屋で、衣服を道士のものに改めた老人から、何が起こっても沈黙せよとの厳命を受ける。[*4]

④ 果たして老人の言った通り、先ず大将軍と称する者が大軍を率いて登場し、子春に名を名乗ることを要求して威嚇を加えるが、子春は一言も発しない。

⑤ さまざまな自然災害、猛獣、悪鬼羅刹、妖魔の類が子春を責め苛むが、彼は一言も発しない。

⑥ 再び登場した大将軍によって、子春の妻が引き出され、ついには剉碓(ざたい)で足先より切り刻まれたが、子春は全く動じない。

⑦ 大将軍の命令によって、斬殺された子春の魂は、閻羅王（閻魔）の前に連行され、地獄の責め苦の尽くを味わわされた挙げ句、宋州単父(ぜんほ)県（山東省単県）の県丞の家に女性として再生させられる。

⑧ 絶世の美女として生まれ変わった子春ではあるが、相変わらず一言も発さず、唖女と見なされる。

⑨ その美貌の噂を伝え聞いた盧と言う進士志望の人の強い懇請によって結婚。一子をもうけるが、相変わらず一言も発しない。

⑩ 子春が一言も発しないのは、自分を馬鹿にしているからだと思った夫により、子供が惨殺されたのを見た子春は、思わず声を漏らす。

⑪ 術は破れ、彼はもと居た一屋中に端座していたが、火災が発生。老人によって救い出されたものの、仙薬精錬は失敗に帰した。人間の情のうち、「愛」だけが捨て去れなかった子春に、再び人間世界へ戻るよう諭した老人は、再び仙薬精錬の作業に取りかかる。

⑫ 俗世間に戻った子春であったが、誓いを守れなかったことを老人に詫びようと、再び華山雲台峰に登ったが、人影は見あたらなかった。

これらの場面のうち、「試し」―インド説話や仏教説話で言う「試魔」―と呼ばれる④から⑩、特に④から⑦までの場面に、道教的色彩を帯びた用語が見出されたのであった。

二

(1)黄冠縫帔

杜子春を華山雲台峰の一屋に誘(いざな)った老人が、それまでの服装を改めて身にまとったのが、黄冠縫帔（または、黄冠絳帔）であった。[*6]

このうち、黄冠は、黄色いかぶり物。『礼記』巻一一「効特牲」に、

野夫は黄冠す。黄冠は、草服也。

と見えるように、元来は、草で作られた農民のかぶりもの。質素なかぶりものを称したが、唐代迄には、道士のかぶりものであるとの認識が持たれ、

○李淳風は、岐州は雍(よう)の人也。其の先太原より徙(うつ)る。父播は、隋の高唐尉なるも、秩卑くして志を得ず。官を棄てて道士と為る。頗

る文学有り、自ら黄冠子と号す（『旧唐書』巻七九「李淳風伝」）

○詔に曰く、「故道士、鴻臚卿員外置越国公葉法善、天真精密、妙理玄暢（中略）黄冠を保ちて杖つかず、紫綬を加へるも栄とせず（『旧唐書』巻一九一「方技伝・葉法善」）

○道士を称して黄冠子と曰ふは、跡を老子に寄せればなり（宋、胡継宗『書言故事』道教類）

とあるように、やがてはこの語そのものが、道士の別称になったとされる。[7]

それは唐代の人々の考え方を知る手がかりとして、少なからぬ資料を提供していると思われる詩にも、

○諸侯傾皁蓋、仙客整黄冠（張子容「雲陽駅陪崔使君邵道士夜宴」『全唐詩』巻一一六）[8]

○詣闕三上書、臣非黄冠師（韓愈「送張道士」『全』三四五）

○数里緣山不厭難、為尋真訣問黄冠（唐求「題青城山范賢観」『全』七二四）

○浮丘山上見黄冠、松柏森森登古壇（護国「逢霊道士」『全』八一一）

などと見えることからも、うかがう事が出来る。

＊　＊

縫帔は、先行の注釈書によれば、「縫い目の粗い袖無しの衣」、これが絳帔ならば、「絳い袖無しの衣」とされる。[9]

帔は、漢・劉熙『釈名』「釈衣服」に、

○帔とは披也。之を肩背に披り、下に及ばざるなり。

とあるのだが、管見では、正史や一般の詩文からは、縫帔、絳帔いずれの用例も見出し得なかったが、それぞれ「縫衣」、「絳衣」の用例は見出すことができた。[10]

このうち、「縫衣」は脇の下から両脇を綴った衣。『荘子』に、

○今、子は文武の道を脩め、天下の弁を掌り、以て後世を救ふ。縫衣浅帯し、言を矯め偽り行ひ、以て天下の主を迷惑して、富貴を求めんと欲す（雑篇盗跖第二九）

とあり、[11] また、『墨子』巻一二「公孟第四八」に「絳衣博袍」とあるのに清、孫詒讓『墨子閒詁』では、清、王引之の説を引いて、

○縫衣とは、大衣也。字或は逢に作り、又䌛に作る。

とする。これらの見解に従えば、縫衣とは緩やかな衣服を言うのであるが、必ずしも道士の装束と限定することは出来ないようである。

これらの他の用例では、

○禄山対側門俟召、衣帯絶、不知所為、孝哲箴縷素具、徐為紉綻、禄山大悦、尤能先事取情。禄山魁大、非孝哲縫衣不能勝。天宝末官大将軍（『新唐書』二二一　五上、「逆臣上、孫孝哲」）

などのように、「衣を縫う」と言う動詞を示す用例が、より多く見出される。[12]

この傾向は、唐詩において、より顕著であり、『全唐詩』に見出される、

○夜深聞雁腸欲絶、独坐縫衣燈又滅（劉元淑「妾薄命」巻二四）
○怨啼能至暁、独自懶縫衣（沈佺期「雑詩三首其一」巻九六）
○閨夕綺窗閉、佳人罷縫衣（孟浩然「寒夜」巻一六〇）
○妝成巻簾坐、愁思懶縫衣（孟浩然「賦得盈盈樓上女」巻一六〇）
○河辺酒家堪寄宿、主人小女能縫衣（岑参「臨河客舎呈狄明府兄留題県南楼」巻一九九）
○織素縫衣独苦辛、遠因回使寄征人（張籍「寄衣曲」巻三八二）
○断煙素、縫衣縷（李賀「上雲楽」巻三九三）
○破尽裁縫衣、忘收遺翰墨（元稹「張旧蚊幬」巻四〇四）[13]

と言う用例中、最後に引いた元稹の詩を除き、「縫衣」という名詞ではなく、「衣を縫う」という動詞として用いられており、元稹の詩でも、「翰墨」との対応からすれば、縫衣は文人、学者の衣服を指すものと見て良いであろう。

一方、絳衣は、文字通り「絳（あか）い衣」であり、『後漢書』に、

○光武絳衣大冠せるを見るに及び、皆驚きて曰はく、「謹厚なる者亦た復たこれを為すか」と。乃ち稍く自ら安んず（巻一「光武帝紀第一上」）。

とあるのに、唐、李賢等は後漢、班固ほか『東観漢紀』に、

○上時、絳衣大冠は、将軍の服也。

と有るのを引く。また、『晋書』に、

○漢制一歳に五郊あり。天子と事を執る者とは、服する所各々方色の如くす。百官の事を執らざる者の服は、常に絳衣を服し以て従ふ（巻二五「輿服志」）。

と見えるように、位階を示すものとされている。

これに対し、後漢の章帝が、御殿に出没するという怪しのものの服装を「絳衣披髪（ざんばら髪）」（『後漢書』巻八二下「方術列伝下・解奴辜」）とし、三国魏の公孫淵邸の屋根に現れた妖犬も、「冠幘絳衣」を身につけていたとし（『魏書』八「公孫淵伝」）、『搜神記』では、泰山府君の使者を「絳衣の騶（すう）」つまり、「絳（あか）い衣の使者」とする例が散見される（巻四「胡母班」）。これらの伝承は、絳衣が位階の一つを示すと言うことを踏まえ、これに五行思想が加わり、更には赤系の色彩に一種の呪力を認めた結果であろうか。[15]

唐詩では、

○絳衣陪下列、黄閤謬差肩（沈佺期「哭蘇眉州崔司業二公」『全』九七）

○絳衣朝聖主、紗帳延才子（儲光羲「秋庭貽馬九」『全』一三七）

○自笑吐茵還酩酊、日斜空從絳衣迴（李郢「奉陪裴相公重陽日遊安楽池亭」『全』五九〇）

○絳衣披払露盈盈、淡染胭脂一朶軽（「洛下女郎歌・二首其二」『全』八六七）

とあり、いずれの場合も、「縫衣」の場合と同じく、道士の服装との認識を示したものはなく、また、右に示した奇談に見られるようなものもない。はじめの二首のように位階を示すものも含めて、そのいずれもが「絳い衣」の域を出ない。

三

本稿の注9でも少しく触れたが、「杜子春伝」の注釈書は、その拠り所としたテキストによって二系統に分けることが出来る。筆者が参照した注釈書は、次の通りである。

Ⅰ『太平広記』巻一六（出李復言『続玄怪録』）を拠り所とするもの。

①前野直彬編『唐・宋小説集』（中国古典文学大系第二四巻、平凡社、一九六八年）[16]

②内田泉之助・乾一夫『唐代伝奇』（〔乾一夫執筆〕新釈漢文大系四四、明治書院、一九七一年）

③王汝濤ほか『太平広記選』下（斉魯書社、一九八一年）

④西岡晴彦・高橋稔『六朝・唐小説集』（〔西岡晴彦執筆〕中国の古典32、学習研究社、一九八二年）

⑤編者不詳『唐宋伝奇』（華夏出版社、一九九五年）

Ⅱ明、清のテキスト（牛僧孺『玄怪録』[17]など）を拠り所とするもの。

A塩谷温『晋唐小説』[18]（国訳漢文大成・文学部一二巻、国民文庫刊行会、一九二〇年）

B陳舜臣『ものがたり唐代伝奇』（朝日文庫、朝日新聞社、一九八三年）

C姜雲・宋平校注『玄怪録・続玄怪録』（上海古籍出版社、一九八五年）

D今村与志雄『唐宋伝奇集』下（岩波文庫、岩波書店、一九八八年）

E蘇道明選訳『玄怪録・続玄怪録』（浙江古籍出版社、一九八九年）

これらのうち、Ⅱの系統のテキストは、原文に「絳帔」とあるので、問題がないのであるが、Ⅰの系統、すなわち「縫帔」とするテキストを拠り所とする注釈書のうち、①、②、④が「赤いうちかけ」としている。

②の注釈書の執筆者である乾一夫氏は、次のようにこれを説明する。

真っ赤なうちかけ。「縫」は、「絳」（一本「絳」に作る）の仮借で、真っ赤な意。『説文』に「絳は大赤なり」とある（同書三六四頁）。

「論考1」に引いた、清、朱駿声『説文解字通訓定声』にも、

絳は、叚借（仮借に同じ）して縫と為す。

とあり、乾説を補強する。しかし、この説にも問題があるようである。

＊　＊

縫帔を正しいとし、絳帔の仮借と見る考え方は、一つの有力な可能性を示すものであることは否めないが、その前提として、拠り所となった『太平広記』なるものが、唐代伝奇を見る上で最も信頼のおけるテキストであるとの考え方があるものと思われる。

周知のように『太平広記』は、北宋、太宗の太平興国二年（九七七）、李昉らが勅命を受けて四七五種の古書の中から、奇談異聞の類を抜き出して編集し、翌三年に出来上がったものである。この点だけを見れば、明、清の頃、利潤を第一とした当時の民間の書肆によって発刊された校訂の十分でない、多分に怪しげな唐代伝奇の諸本に比べれば、信頼を置くことが出来ると言って良い。[19]

しかしながら、本書は、完成後三年目の太平興国六年、出版の勅命が出たものの、出版中止となった。最近の研究に依れば、宋本が存在した可能性が高いと言われてはいるが、[20]北宋本はおろか、南宋本も現存しない。現行の最も信頼できるテキストとされる汪紹楹点校『太平広記』（中華書局、一九六一年）[21]が拠り所としたのは、明代になって、談愷が写本を手に入れて、泰次山・強綺膝・唐石東らと校訂を加えて、嘉靖四五年（一五五六）に刊行されたものを底本とし、[22]それに明、清代の諸本を参照して成ったものである。しかも、この最も信頼できると言われる中華書局本ですら、刊行されて四十数年が経過しており、その後の同書の版本研究のめざましい発展を反映したものとは言えず、程毅中氏の指摘するように、その校訂は必ずしも誤謬がないとは言えぬようである。[23]

これは、後日詳細に報告する予定であるが、増子が北京国家図書館善本室で閲覧した『太平広記』の諸本のうち、汪紹楹氏も校訂に用いたという明、呉郡の沈氏所蔵『沈氏野竹斎鈔本』の当該部分を見ると、「黄冠絳帔士」とする。これは、台湾商務印書館から影印本の出た文淵閣四庫全書本『太平広記』と同様であり、さらにまた、同図書館善本室所蔵で、牛僧孺『玄怪録』の面貌を比較的良く伝えるとされる明、陳応翔刻本『幽怪録』[24]も同様である。また、抄録、節録であって、必ずしも原本通りではないとの指摘はあるものの、南宋、紹興六年（一一三六年）に成ったという曾慥『類説』巻一一「病在膏肓」[25]も同様であった。

これらを全て「後世の妄改」と見なすべきか否か。

四

道教の文献に目を転ずると、「東洋學研究者のための電脳四寶・道氣社」（URL http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~dokisha/）に公開される道教文献データベースに収録される文献三一種、すなわち、

1真誥、2登真隠訣、3周氏冥通記、4紫陽眞人内伝、5真霊位業図、6度人経四注、7無上秘要、8道教義枢、9道門経法相承

次序、10三洞奉道科戒營始、11陸先生道門科略、12太真玉帝四極明科経、13雲笈七籤、14宗玄先生玄綱論、15宗玄先生文集、16黄庭内外景経、17悟真篇（修真十書）、18西昇経集註（本文のみ）、19太上老君説常清静経註、20老子説五廚経、21老子想爾注、22老子河上公注、23老子王弼注、24老子玄宗注、25老子玄宗疏、26道徳真経指帰（道蔵本）、27養性延命録、28化書、29玄珠録、30赤松子章曆、31太上宣慈助化章

からは、「縫帔」・「縫衣」の用例は見当たらない。

一方、右に示した文献中、「絳帔」、「絳衣」の用例は、

○侍者兩人、皆絳衣。進坐乃言曰、德秀之美、感乎幽冥。

○一人年可三十餘。黄華冠雲錦毛衣。（侍者四人。執紫毛節。持流金鈴。此馮眞人也。眞誥有）一人芙蓉冠絳繡衣。

○乙未年七月三日夜。有九女人來。斉著青衣、絳緑緑衣。下紫為腰帶。

○青衣玉女五人。朱衣玉童七人（中略）絳霄之衣（以上、『周氏冥通記』）。

○正一法師。玄冠黄裙絳褐絳帔二十四條（『洞玄靈寶三洞奉道科戒營始』）。

○赤帝玉司君衣絳章丹衣（『無上祕要』[26]）

のように、少なからず見出され、しかも、真人、玉女（即ち仙女）、赤帝、極玄天太虚君（『無上祕要』）等、概ね常人を超越した存在の着衣と認識されていたことは注意されるべきであろう。[27]

このように、あかい着衣を特別なものと見る傾向は、先に示した志怪、伝奇において、冥界の使者の着衣がそうであったのと通底するものと思われる。

こうした発想には、五行思想が勿論深く関わっているであろうが、この色彩に、火、血、そして太陽から連想される破邪の威力を認めた古代以来連綿と続く、この国の人々の思いが深く関わっていると言えるのではないか。[28]

さらに、道教関係の文献から、帔に関する記述を見ると、

○帔者、披也。内則披露肝心、無諸滓穢、外則披揚道徳、開悟衆生、使内外開通、彼我皆済、随時教化、救度衆生、一切帰依、此最為上（唐、張万福『三洞法服科戒文』）。

とあるように、道教上の重要な法服であると位置づけられている事が分かる。

今日の道教関係の解説書によれば、絳衣は、高位の道士が、大きな儀式に際して着用するもの。内側は、青く、その両袖は寛く両腕を開いた時には、ちょど四角形となるよう作られている。[29]

かつて、「論考2」で、図と共に示したが、その後入手した資料によれば、今日道士たちが身に着ける絳衣は、真紅の地に金糸銀糸が彩られ、「絳繡衣」（『周氏冥通記』）と呼ぶにふさわしい目にも鮮やかな装束である。[30]

唐代の絳帔がこれと全く同じものとは言い切れぬものの、当時の

絳帔もかくやと思わせるものがある。これを見れば、脇で綴ってあること、また緩やかな形状から、「縫衣」と言って言えなくはない。

しかし、先ず目に飛び込んでくるのは、目も彩な真っ赤な色である。

これを「杜子春伝」のテキストの問題、諸種の文献、とりわけ道教文献に見える事の多少などとを勘案すれば、敢えて「縫帔」として、これを「絳帔」の仮借と見ることにどれほどの整合性があるかは疑問と言わざるを得ない。

【注】

＊1 ①「唐代伝奇『杜子春伝』に関する一考察」（『日本文学研究』第二八号、梅光女学院大学日本文学会、一九九二年）

②「同〔続〕―道教的語彙を中心に」（『同誌』第三〇号、同会、一九九三年）

③「同(3)―いわゆる『試し』の場面の二つの語彙をめぐって―」（『同誌』第三一号、同会、一九九四年）

④「同(4)―破局を予想させる二つの用語をめぐって―」（『同誌』第三二号、同会、一九九五年）

⑤「同(5)―小結―」（『同誌』第三三号、同会、一九九五年）

なお、小考では、①を「論考1」とし、以下「論考2」、「論考3」、「論考4」、「論考5」と称する。

＊2 このことは、次に示すストーリーのあらましを参照されたい。

＊3 「論考2」

＊4 ここでは、この沈黙の業が、仙薬精錬の鍵を握っていることは明言されないが、巨大な仙薬を作るための炉が設えられていることなどから、それがうかがわれるという設定になっている。

＊5 藁などを刻む「押し切り」と言われるものであろう（「論考3」参照）。

＊6 「杜子春伝」には、何種類かのテキストがあるが、『太平広記』では、李復言『続玄怪録』に収めるとして、「黄冠縫帔」と表記。一方、明、陳応翔刻本『幽怪録』（牛僧孺『玄怪録』。この名称は、宋人が王朝の始祖玄朗の「玄」字を避けて付けたものとされる）をはじめとする諸本では、「黄冠絳帔」と表記する。

＊7 「論考2」参照。

＊8 『全唐詩』は、以下『全』と表記し、巻数のみ表記する。

＊9 これは、基本的には、それぞれの注釈者が本稿注6に示した二系統のテキストのいずれかに依ったかにより、二つの方向に分かれる。この点については、後に詳述する。

＊10 台湾中央研究院の漢籍文献データベース「瀚典全文検索系統2.0版」URL http://www.sinica.edu.tw/ftms-bin/ftmsw3 による。

＊11 縫衣浅帯とは、緩やかな衣、広い帯。儒者の服装とされる。

＊12 ○其皇帝得以作縷縫衣、皇后得以作巾絮而已（『後漢書』志第四礼儀上「先蠶」）。

○女史二人、掌縫衣裁服纂組之事（『金史』巻五七、志第三八「百官三」宮人女官）。

○挫鍼、縫衣也（『荘子』巻二中「人間世」に付せられた清、郭慶藩『荘子集釈』の疏）など。

＊13 蚊幬とは、蚊帳。

＊14 この他、『太平広記』巻一一「劉憑」（出『神仙伝』）でも、数十人の「絳衣披髪」の怪しのものが出現したとの記述が見られる。

＊15 六朝志怪、唐代伝奇の「入冥譚」と呼ばれる一連の話には、冥界からの使者の服装を絳衣、朱衣、赤衣とするものが多い。この問題は、拙稿「『死神』談義―中国古小説を中心として―」でも触れた（佐藤泰正編『文学における死生観』〔梅光女学院大学公開講座論集第三八集、笠間選書一七三、一九九六年〕所収）。また、この点については、本稿で後に改めて触れる。

＊16 同書の唐代伝奇の部分は、それ以前に出た同氏編の『六朝・唐・宋小説集』（中国古典文学全集第六巻、平凡社、一九五八年）、『唐代伝奇集1・2』（東洋文庫2・16、平凡社、一九六三、六四年）と、ほぼ同内容である。

＊17 『古今説海』などでは、鄭還古（ていかんこ）「杜子春伝」とするが、既にこれは否定されているので、ここでは採らない。この件について、並びに諸テキストについては「論考5」参照。より詳しくは稿を改めて論じたい。

＊18 これと同じく塩谷温注で、川端康成訳の『杜子春伝』（『支那文学大観』第一〇巻、同刊行会、一九二六年）も同じである。

＊19 これらの民間業者の発刊したテキストは、作者すら妄りに改めている事が良く知られており、夙に魯迅が、『唐宋伝奇集』所収の「稗辺小綴」で指摘するところである。

＊20 この点については、中国人民大学の張国風氏が精力的に論文を纏めている。増子は、九九年から二〇〇〇年にかけて、北京大学中文系に訪問学者として滞在中、氏と会談する機会を得て、その論考抽印を恵与された。このことは、別に稿を改めて紹介したい。

また、国内の論考としては、富永一登「『太平広記』の諸本について」（『広島大学文学部紀要』第五九巻、一九九九年一二月）があり、極めて参考になった。本稿の記述も、多く氏の論文を参考にさせていただいた。

＊21 このテキストは、一九五九年七月に人民文学出版社から刊行されたテキストを改訂したものである（汪紹楹氏の点校説明による。人民文学出版社本は、近藤春雄『中国学芸大事典』〔大修館書店、一九七八年〕では、洋本七冊、一九五七年刊とするが、刊期は汪紹楹氏の記述と一致しない）。

＊22 汪紹楹氏の点校説明に依れば、談愷本は三種あると言うが、前記の張国風氏が、北京図書館（現国家図書館）で、第四種目のテキストを発見した（張国風「試論『太平広記』版本的演変」〔『文献』一九九四年第四期〕）。増子も、このテキストを国家図書館で実見した。

＊23 同氏「《太平広記》的幾種版本」（『社会科学戦線』第三期総四三期、社会科学戦線雑誌社、一九八八年）。

＊24 陳応翔刻本は、古小説叢刊の一冊として活字本となっている（中華書局、一九八二年）。この指摘は、同書に付せられた程毅中氏の点校説明による。

＊25 増子が参照したのは、①明、天啓（一六二一～二七）刊本（文学古籍刊行社影印、一九五五年）、②明、有嘉堂抄本（国家図

書館善本室蔵)、③文淵閣四庫全書本の三種である(ちなみに、国家図書館蔵の天啓刊本は、この部分を欠いている)。

同書には、この他一三例が見られる。

この他、ここに示した道教文献の中、赤衣、朱衣、紅衣などの用例は枚挙に暇がないが、紙幅の関係もあり、本稿では指摘するにとどめる。

*26 *27 青木正児「周代の美術思想」(『青木正児全集』巻一所収、春秋社、一九六九年)、拙稿「詩経色彩小考」(『武相学誌』2、武相学園、一九七八年)。但し、冥界の使者の着衣があかい事については、古代インドの冥界の王者YAMAの着衣が、血の色をしていると考えられていたこととも深く関わっているものと思われる(拙稿「『死神』談義—中国古小説を中心として—」(本稿注15参照)。

*28 胡孚琛(ふしん)主編『中華道教大辞典』(陳耀庭執筆)、中国社会科学出版社、一九九五年)。

*29 新たに入手した資料とは、『道教文物』(台湾国立歴史博物館刊、一九九九年)。同書は、中華民国道教総会の協力によって同博物館で催された道教文物の展示会に際して出版されたものという。

*30 この書籍の存在については、北京大学滞在中に、隣接する清華大学の葛兆光氏に示教を受け、その後、台湾の輔仁大学日語系で教鞭を執る、勤務校の卒業生である中村祥子氏の手を煩わせて入手したものである。ここに記して、両氏に感謝の意を表したい。

原本は優れた印刷技術によって、絳衣の色彩を余すところ無く伝えるが、本稿はモノクロ印刷という制約の為、十分その様子を伝えられぬのを遺憾に思うが、その形状だけでも伝えられればと思い、敢えて左にその写真を載せることとした。

絳衣図(『道教文物』台湾国立歴史博物館刊、1999年)